

2022年



# マナ通信



## 今月のマナ通信

- ◎1月の週日の聖書日課 (マタイの福音書、ヨブ記、他)
- ◎土曜日・日曜日の学び (主エイスのたとえ話) からの感想です。

**私**もそうですが、自己満足が多く、自分中心に物事を考えそれを押し通し満足します。判断の基準を自分に置き、人よりも勝っていれば喜び、劣っていれば悲しむ、なんとも恥ずかしい自分がそこにいます。

天の御国は、自分のぶどう園で働く者を雇うために朝早く出かけた、家の主人のようなものです。主人は1日に5回市場に出かけ、労働者を雇いました。早朝、朝9時、昼12時、午後3時、午後5時にです。賃金の支払いの時、午後5時にぶどう園に来て働く時間の一番短い人から1タラント支払われました。

それを見ていた「早朝から働いていた労働者」は期待しました。自分は早朝からだからいくら支払われるだろうか! しかし、結果はやはり1タラントでがっかりし、不満で一杯でした。

そうであれば、早く言ってくれば、自分も夕刻5時に、ぶどう園に来たのに……気持ちは分かります。しかし、それはこの世での考えで神の国は違います。

神の国は地域ではなくて、神の支配、統治です。天地万物を創造された神様、神は特に人間に自由意志を与え、全ての動植物を支配する権限を与えて下さいました。そして、神は我々を愛して下さいました。神はひとり子を犠牲にしてまでも愛して下さいました。アブラハムがモリヤの山でイサクを屠ろうとした時、神から「待った」の声が掛かりました。

神はアブラハムにとって目に入れても痛くないイサクを思うアブラハムの心境を察したのでしょうか。驚くことは、アブラハムは神を信頼し、第一にしていたことです。

ぶどう園に5時から来た人を神は不憫に思ったのでしょうか。高齢で力もない労働者を雇う人はいません。朝から市場に立ち続け、お腹もすかし、不安に怯える労働者を神は不憫に思ったのでしょうか。神は全てをご存じなのです。

そして、解説では、私たちが「午後5時の労働者」だと締めくくっています。結論として神の国では、後の者が先になり、先の者が後になります。(マタイ20:16)

教会で見せてもらった賞った水野源三さんの「瞬きの詩人」を思い出します。幼くして流行した伝染病にかかり、体の自由を奪われてしまったのです。用便も自分ですることが出来ません。

オマルを寝ている傍らに置き、抱きかかえ、さげてもらって用をたす状態でした。どんなに、悲しく、辛かったことでしょう、想像の域を超えています。特に夜は長かったことでしょう。

身動きが出来ず、ひたすら朝を待つ。新聞配達の声、牛乳配達の声、源三さんにとっては、待ちに待った心躍らせる朝の到来でした。神様は見捨ててはおきませんでした。

弟嫁が源三さんの介護を真心をもってして下さいました。言葉のしゃべれない源三さんに「あいうえ」の文字を指さし、該当する文字が出ると源三さんが、瞬きで応答します。このようにして詩が作られて行きました。それが新聞社の目に止まり、一躍、詩人となりました。

重荷に思っていた弟も、会社が倒産に追い込まれようとしていた時、源三さんから支援を受けました。

もうすぐ目が見えなくなるという息子を連れてある母親が訪ねて来ました。そして、これからの生き方のアドバイスを源三さんに求めました。源三さんは「自分を他人とは比べるな」と教えられました。シンプルで誰にでも分かる言葉ですが、なかなか人間にとっては実行が難しいことです。しかし、源三さんは

これを見事にやってのけました。いや、神の導きがあったに違いありません。やはり、神の国では、後の者が先になり、先の者が後になります。(畑中伸之)

**ク**リスマスとは、私はなんとカッコイイ呼び方なんだろうと思った。自分がこの道に進もうとは……最初の1年間何も分からず信じることもせず1年で止めた。すると、主人が俺も入るから二人でやり直そうと言ってくれた。もう一度出直そうと思い自分の身辺整理からやろうとした。それまでは「神様」と呼べるような人間では無かった。聖く、正しく生きる神様に好かれるような生き方をしないと、180度転回した人間にならねばと思い、身の周りのふさわしく無いことを止めて行った。

不従順でかたくなで感情の激しい性格をどうしたら良いか悩んでいた私に、聖霊様が与えて下さったのが聖書の中の「ローマ人への手紙」です。1週間予習し答えを出して行く私は、その事に没頭し学びに精を出した。

その事によって、日々新しいものの発見に、心が内側から喜びで一杯になった。性格も穏やかで人に優しく、冷静な日々をやっと送れるようになった。そして欲張りな私ですが、毎日、主と交わり、明るくて楽しい生活が出来るように願っています。主よ心身ともに健康な生活を送らせて下さい。お願いします。感謝です。(畑中千恵子)

**義**に飢え渴く者は幸いです。その人は満ち足りるからです。(マタイ5:6)

「みことばを味わおう」に、「義に飢え渴く」とは、信仰によって義とされた人が、神の完全な基準に達したいと願うことです。とありました。

主イエス・キリストが私の罪のために十字架上で死んで下さいました。そのお陰で、私の罪はすべて赦されており、もう赦しを求める必要はありません。キリストの義は、私の義となりました。感謝のほかありません。キリストの義を着せられたお陰で、私は神様の御前にキリストにあって完全なのです。

しかし、今、完全にされつつある人でもあることを知っております(聖化)。義への願望、いつも神様と正しい関係にいたいという願いがあります。

私が神様を知ることを妨げ、また神様のみもとにあるあらゆる良いものが私たちにもたらされ益となることを妨げている古い性質を悟らせていただけていますように願っております。

そのために聖霊様が働きかけてくださり、励まして下さっていることを感謝いたします。

「主はこう言います。わたしはあなたを教え、最善の人生へと導こう。

助言を与えて、一步一步を見守ろう。」(詩32:8/ビンガバウル)(福島三弥子)

**力**カ15章の放蕩息子のたとえ話にまた今まで気づかなかった事を、教えて頂きました。弟が父から財産を分けて貰い、放蕩三昧を尽くして、落ちぶれて生家に戻ってきました。ここまでは今でもありそうな展開です。帰ろうという気持ちが起こると言うことは、父親を頼れるという気持ちがあったのでしょうか。

ずっと父を助けて真面目に働いてきた兄は当然不服です。おそらく兄は父親が帰ってきた弟をなじり家から閉め出したりしたら、父と弟の中を取り持ったのではないかと、想像します。人間の父親なら小言の一つも言うのが、普通の展開でしょう。

この父は咎めるところか走り寄って迎え、宴会を催します。「死んでいたのが生き返ったのだから、一緒に祝おう」と兄を説得します。これに対する反応は、私たち一人一人が自分の人生で応答云々と67頁の4、5行目に書かれています。私は口をとがらせて父に抗議するか、心の中でつぶやくかでしょう。

父親と一緒に心から喜べるようになりたいものです。悔い改め主に頼りゆく者にはどこまでも赦しのお方であることを、味わいました。(広瀬裕子)

**主**はサタンに言われた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは主に答えた。「地を生き巡り、そこを歩き回ってきました。」(ヨブ2:2)

主はサタンにどこから来たのかと問いかけました。その後の対話を見ると、主はサタンがヨブに目を付

けたことをご存じの上で、あえて問いかけたことが分かります。これは、創世記で主がアダムに「あなたはどこにいるのか。」と問いかけた箇所と似ていると思いました。

主は全てをご存じですが、あえて問いかけます。サタンにせよ人間にせよ、自分の言葉を発する時、その内面が表れ形作られるのだと思います。それゆえに言葉はとても大切です。

祈りも声に出すと、心の中で祈るよりもはっきりした祈りになるような気がします。ヨブ記では、ヨブが妻や友人、さらに主との議論を通して信仰が今まで以上にはっきりした過程が描かれています。

もしヨブが盲目的、感情的な信仰者であったら、このような境地に立つことはなかったでしょう。ヨブもダビデも、苦しみの中で主に言葉をぶつけました。

イエス様も三位一体の神であられるにも関わらず、父なる神に言葉を使って祈りました。言葉は主の御力であるのだと思います。感謝します。(永井亮子)



**ロ**イドジョンズ兄の本を紹介してくださり、感謝しています。初めて聞いた時には、聖書の1章に対してのページ数のあまりの多さに圧倒されて、とても手に負えないと思ってしまいましたが、読んでゆくうちに、自分だけでなく、クリスチャンならどうしても読んでほしいと思うようになりました。

ページ数が多いうえに、解説が広く深いので、早くは読めませんが、ゆっくりと時間をかけて読むなら、しっかりとした信仰を持つ信仰者になれそうな気がしてきます。

ロイドジョンズ兄によれば、自分を見てクリスチャンはクリスチャンでないと。ならば、私もクリスチャンではなくなります。

父なる神、主イエスキリスト、聖霊様、それらの御わざをしっかりと見つめ、信じるクリスチャンになりたいです。(高橋美枝)

**落**胆している者には、友からの友情を。さもないと、全能者への恐れを捨てるだろう。」(ヨブ6:14) 実用聖書注解も参考に読んでみました。ヨブは友人たちに温かい友情を期待したが、返って来たのは、ヨブの罪を責める言葉でした。

ヨブはその失望を、砂漠の隊商が川を目当てにやって来て、川に水がないのを発見した時の失望にたとえています。そして友人たちに、自分が友情を裏切られるようなことをしたかどうかと問うています。

ヨブには隠れた罪があるに違いないと決め付ける友人たちに、自分がどんな罪を犯したのか言ってくれと尋ねています。因果応報の原理ですべてを切ろうとする彼らに、ヨブは「今、思い切って私のほうを向いてくれ」(28節)、自分のありのままの現実を見せてくれと訴えています。

「落胆している者」(14節)は原語では「心が溶けつつある者」という表現だそうです。また「友情」

はヘブライ語ヘセドで親切、特に低く貧しく惨めな人に対する親切を表す語だそうで、新約聖書のギリシャ語アガペーに当り、契約に基づく愛とも言われ、新改訳2017の欄外注のように「変わらぬ愛」と訳すことも出来るそうです。過去に自分に起こったことを思いだし、解説に励まされました。(木村邦夫)

**ま**ことに、もう一度あなたがたに言います。あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。」(マタイ18:19-20)

主がともにいてくださり、地上での生活をいつも見守ってくださいます。時に、自分の願いがかなわないこともありますが、それは、主のみこころではないのかも知れません。

このみことばを心に留めて歩めたら、なんと幸いなことでしょう。やがて、『主の御前に立つ』ことを覚えて、感謝して、一日一日を過ごしていきたいと思います。(外處トミ)

あなたがた 二人が心 一つにし  
祈るなら主は かなえてくださる  
2022年1月31日



群馬県安中市の「ろうばいの郷」

**イ**エスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』これが、重要な第一の戒めです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」(マタイ22:37-40)

神様がまず私を愛してくださったことを覚えて感謝します。神様が私を愛してくださったように、私も神様を愛し、隣人を愛して歩んでいきたいです。(外處結実)

**わ**たしがおまえをあわれんでやったように、おまえも自分の仲間をあわれんでやるべきではなかったのか。」(マタイ18:33)

この御言葉から、私自身が「自分には甘く、人には厳しい。」愚かな者であることを改めて示されます。自分が過去に行った多くの罪を忘れ、人が同じようなことをすると、すぐにさばく気持ちが出てしまいますが、その時、神様から「おまえは昔の自分の罪を忘れたのか？」と聞かれます。

そうすると、私は返す言葉も無く、口を閉ざさざるを得なくなります。私に起こる多くの試練は、結局私自身が過去に行ってきた罪に対する報いを受けているように思えます。

キリスト者は、主を信じる前にこの世で行った罪を、主を信じた後に全て清算させられるようになっているのではないかとと思われるほどに、私が犯した罪を適応された的確な試練が与えられますので、今の試練はいつ犯した罪の清算なんだろうと考えることが多くなりました。

その神様の方程式によって、私はあとどのくらい聖めていただく必要があるのかと思い巡らすと、まだまだ完了はかなり先のように思えますが、神様に愛されて導いていただけていることを嬉しくも思い、さらに御国へのあこがれが増すのです。(外處徳昭)

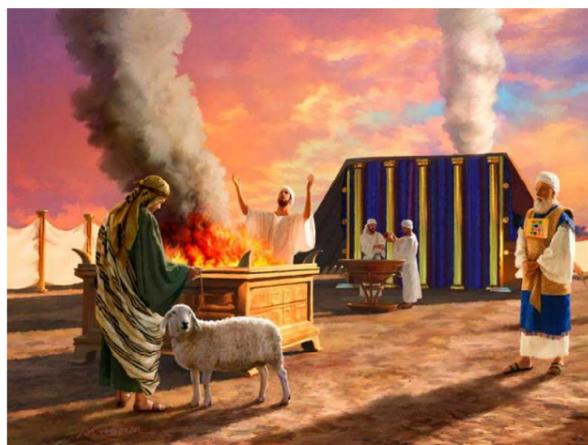


**彼**らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった。……39 通りすがりの人たちは、頭を振りながらイエスをののしった。40 「神殿を壊して三日で建てる人よ、もしおまえが神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」41 同じように祭司長たちも、律法学者たち、長老たちと一緒にイエスを嘲って言った。42 「他人は救ったが、自分は救えない。彼はイスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおう。そうすれば信じよう。43 彼は神に抛り頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」44 イエスと一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。45 さて、十二時から午後三時まで闇が全地をおおった。46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。47 そこに立っていた人たちの何人かが、これを聞いて言った。「この人はエリヤを呼んでいる。」48 そのうちの一人がすぐに駆け寄り、海綿を取ってそれに酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けてイエスに飲ませようとした。49 ほかの者たちは「待て。エリヤが救いに来るか見てみよう」と言った。50 しかし、イエスは再び大声で叫んで霊を渡された。51 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。(マタイ27:34,39-51)

過越の祭りの間に、世の罪を取り除く神の子羊なるイエス・キリストが死なれることは、神の永遠のご計画の中にありました。ユダヤ人歴史家ヨセフォスによれば、当時、その祭りには海外から270万人ものユダヤ人たちがエルサレムに巡礼に集まっていたと言われていました。

その祭りの日の神殿では、祭司たちによって「過越の子羊」をささげる儀式が行われます。平行して同じ日、同時刻に、「世の罪を取り除く神の子羊」(ヨハネ1:29)なるお方が全人類の罪を贖うためにほふられ、十字架で贖いの血を流されたのです。

十字架に釘づける前に、兵士たちは主イエスに「苦みを混ぜたぶどう酒」を飲ませようとした。それは麻酔剤として死刑囚に与えられるものでした。イエス様はそれを飲もうとはされませんでした。主に



は、感覚を失うことも痛みを和らげることもなく、私たち人間の罪の重荷をすべて負われる必要があったからでした。

通りすがりの人たちは、身代わりに死のうとしておられるお方をののしりました。祭司長たちも、律法学者たち、長老たちもこのあざけりに加わりました。ユダヤ教の指導者たちは、主がご自分を救い主、「イスラエルの王」、「神の子」と主張なさったことをあざけりました。さらにイエスと一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエス様をののしりました。

主は人々の手によって加えられた苦しみや侮辱を耐え忍んでくださいましたが、それに比べればもっと大変なことに、直面しようとしておられました。

「十二時から午後三時まで」、パレルチナの全地だけでなく、主のきよい魂にも暗闇が覆いました。まさにこの間に、主は、私たちの罪のために言語に絶する呪いを受けてくださったのです。この3時間のうちに、地獄の苦しみが凝縮されたようなかたちで主に臨み、私たちの罪に対する神の義の怒りがすべて主の上に乗ったのです。

罪に対する神の義なる要求を完全に満たすために、この3時間のうちに、主が代価を支払い、借金を返し、人類の贖いのために必要なみわざを成し遂げてくださったのです。

「3時ごろ」、主は大声で「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれました。父なる神は聖なるお方であるため、罪を大目に見ることはおできになりません。それどころか、罪を処罰されなければなりません。

人となられた神の御子のイエス様には何一つ罪はありませんでしたが、私たちの罪をその身に負ってくださったのです。さばき主としての神様は、私たちの身代わりとなってくださったお方の上に私たちの罪を置かれたのをご覧になった時、ご自分の愛する御子から視線をそらされたのです。それは父なる神にとってもどんなに辛いことであつたことでしょうか。

主イエスが息を引き取られた時、神殿の聖所と至聖所を隔てていた、織られた厚い幕が、目に見えないお方の手によって「上から下まで」裂けました。この時までには、この幕があったために、大祭司以外の者はだれひとり至聖所(神が臨在される所)に入ることができませんでした。至聖所に入ることができたのはひとりだけであり、しかも、1年のうちたった1にちしか入ることができませんでした。

ヘブル人への手紙から、この幕がイエスのからだを表していることが分かります。その幕が裂かれたということは、主が死なれ、そのからださがさげられたということを表しています。

「こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることが できます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。また私たちには、神の家を治める、この偉大な 祭司がおられるのですから、心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。」(ヘブル10:19-22)

今では、どんな時でも、祈りと賛美をもって、私たちの誰もが神の御前に出ることができるのです。しかし、この特権はイエス様の血という途方もない代価をもって買い取られたものであることを忘れてはなりません。何と感謝なことでしょう。(福島勲)



貴重なご感想をありがとうございました。

次回はマナ2月号の感想を3月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。(畑中)